慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの価値論に就いて（四、完）
Sub Title	
Author	加田, 忠臣
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.9 (1919. 9) ,p.1229(127)- 1237(135)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190901-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

盛んになれば、消費財の需用が減退し、其市價は勿論幾分か低落するに相違無いが、貯蓄せられたる金子は貯蓄箱に死藏せらるゝのでは無く、貯蓄銀行又は郵便局に預入せらるゝを常とし、而して此預金は銀行又は大藏省に依りて諸種の事業に對して貸與せられ、斯く貸與せられたる資金は貨物の購入又は勞働者の雇傭の爲めに費消せらるゝものであるが故に、一旦低落した物價は再び騰貴するに至ることを看過してはならぬ。此貯蓄の奬勵に依る物價調節策を有効的たらしめんと欲せば、矢張り貯蓄を奬勵すると同時に通貨を收縮せねばならぬ。

英佛等に於ては物價の奔騰を防止する爲に暴利に對し峻嚴なる取締を加へんとしてゐるが、通貨の收縮を伴はざる暴利取締は不徹底なる物價調節策であると云はざるを得ぬ。商人が昨日十圓に仕入れたる貨物を今日三十圓に販賣し、又は製造業者が五圓の生産費を以て製造したる物品を二十圓に賣るとすれば、或は夫れを暴利と看做すことが出來るであらう。然しながら、單に販賣價格が高きの故を以て、暴利を云々することは出來ない。縱令、賣價が五十圓であらうとも、仕入價格又は生産費が四十五六圓に達してゐるとすれば、之に對して何等制裁を加ふるの餘地が無い。而かも通貨が膨脹してゐる際には、總ての競爭貨物の市價並に賃銀は其の膨脹の程度に應じて騰貴するものであるが故に、仕入價格も生産費も昂騰する結果として、貨物の賣價が高率に上つて居つても、其貨物の販賣者を罰することが出來なく爲る。

之を要するに、通貨收縮以外の各種物價調節策を有効的ならしむるには、矢張り通貨の收縮を行はねばならぬ。是れ予が上文に於て通貨の收縮を以て最上の物價調節策と稱した所以に外ならぬのである。而して通貨を收縮する方法としては(一)日本銀行の金利を引上ぐること、(二)兌換劵發行に對して累進稅を課すること、(三)在外正貨をば兌換劵の正貨準備より除外すること、(四)郵便貯金利子を引上げ、貯金の增加額をば政府に於て外國公債に投資すること、(五)租稅を增徵して、之を財源として我國の外債を償還すること、(六)補助金の交付、利益の保證或は其他の方法に依りて海外投資を奬勵すること、(七)政府の買上品は出來得る限り外國より之を購入すること、(八)內地品の輸出を制限すること等を擧げ得る。尤も是等の手段は單に通貨を收縮するの目的を達するに有効なるものであつて、其の結果より判斷して必ずしも政府の採る可き政策であると云ふことを得ない。否な是等の方策の多くには幾多の弊害の伴ふものあるが故に、其の實施は角を矯めて牛を殺すの結果を呈するの虞れがある。然し之に關する評論を試みるは本稿の範圍外に屬するから此處に於て擱筆する。

アダム・スミスの價値論に就いて（四、完）

加田忠臣

（十五）

デビッド・リカルドは財の價値は其生産に必要なる勞働の相對量によりて決定せらるゝものとなし、(1)アダム・スミスの價値說を批評して次の如く言へり。

"Adam Smith, who so accurately defined the original source of exchangeable value, and who was bound in consistency to maintain, that all things became more or less valuable in pro-

portion as more or less labour was bestowed on their production, has himself erected another standard measure of value, and speaks of things being more or less valuable, in proportion as they will exchange for more or less of this standard measure. Sometimes he speaks of corn, at other times of labour, as a standard measure; not the quantity which it can command in the market: as if these were two equivalent expresions,.....(2)

リカルドは價値の原因並に秤量――リカルドの言葉を借りて言へば標準尺度（Standard measure）――は共に財の生産に投ぜられたる勞働の分量に依りて決定せらるゝものなりと主張し、投ぜられたる勞働の分量と支配せられる勞働の分量とに對するスミスの使ひ分けを否定せり。即ちリカルドは價値の原因並に秤量は共に投ぜられたる勞働の分量に依るものなりとの一元的主張をなせるものにして、こゝにも理論家たる彼の面目は躍如として表はるゝを見るなり。

リカルドは斯かる見地に立てるが故にアダム・スミスが

"It (labour) may sometimes purchase a greater, and sometimes a smaller quantity of goods, it is their value which varies, not that of the labour which purchase them"(3)

と言ひしは誤りにしてスミスが

"The proportion between the quantities of labour necessary for acquiring different objects seems to be the only circumstance which can afford any rule for exchanging them for one another."(4)

と言へるは正しとせり。即ち彼自身の言葉を以て表はせば次の如しとせり。

"It is the comparative quantity of commodities which labour will produce, that determines their present or past relative value, and not the comparative quantity of commodities, which are given to the labourer in exchange for his labour."(5)

斯くの如くリカルドは「投ぜられたる勞働」を主張して「支配せらるゝ勞働」を退けたるが其論敵はマルサスにして彼は「支配せらるゝ勞働」を主張せり。

マルサス曰く、

"Adam Smith, in his chapter on the real and nominal price of commodities, in which he considers labour as a universal and accurate measure of value, has introduced some confusion into his inquiry, by not adhering strictly to the same mode of applying the labour which he proposes for a measure.

Sometimes he speaks of the value of a commodity as being measured by the quantity of labour which its production has cost, and sometimes by the quantity of labour which it will command in exchange."

It is in the latter sense, however, in which he applies it much the most frequently, and on which he evidently lays the chief stress."(6)

と。マルサスはリカルドに反して其價値起源論に於ても、其價値標準論に於てもLabor-command Standard を採れるものなり。されど既に、マルサスは其 Principles of Political Economy の第二版に於て著しき改訂を試みたりしは其 Advertisement to the Second Edition の筆者が言へるが如し。其内最も注意を要するものは、福田博士の指摘せるが如く左の章句なり。

"The labour worked up in a commodity is the principal cause of its value, but it will appear in this chapter that it is not a measure of it. The labour which a commodity will command is not the cause of its value, but it will appear in the next chapter to be the measure of it."[7]

熱心に、Labor-command Standardを支持せるマルサスが價値の原因は投ぜられたる勞働の分量にして、其秤量は支配せらるゝ勞働の分量なりとするに至りたるは、彼がリカルドと數次の論爭の結果到達せし所にして、其論爭の爲にリカルドがマルサスに與へたる書翰はポーナーの手によりて編纂せられたる Letters of Ricardo to Malthus 1810-1823 の中に收めらる。[8]

マカロック(J. R. McCulloch)は可增性の財の交換價値は其生産に要したる勞働の分量によるとなし、[9] 財の供給が常に必ずしも財の需要と一致すること能はざる狀態にあるを指摘し斯くの如き狀態を解釋する上に於て費用と價値との明快なる觀念を要すとなし彼は費用と價値を次の如く解釋せり。

"By the first, or the value of a commodity or product, is meant its power or capacity of exchanging for or buying other commodities or labour; and by the second, or its cost is meant the quantity of labour which was required for its production or appropriation, or rather the quantity which would be required for the production or appropriation of a similar commodity at the time when the investigation is made."[10]

而して、マカロックに依れば投ぜられたる勞働の分量即ち財の生産に要する費用は市場に完全なる自由競爭の行はるゝ場合に限り其交換價値となり、財の需要と供給とが圓滑に適合せざるときは價値即ち支配せられたる勞働の分量が其財の交換價値を形成すと言ふにあり。而して、マカロックは費用の概念は根本にして價値の概念は第二次的なりとせり。[11]

スミスは國富論第一卷第五章に於て屢々 Value in exchange, Real Value なる語を用ひたり。ダヴンポートは斯かる用語に從ひて Labor-command か Labor-cost かを解決せんとせり。即ち財を獲得せんとする人に對する財の Real-Value は其財の生産に要したる勞働の分量にして財と交換せんとする人に對する財の價値即ち交換價値は其財によりて支配し得る勞働の分量なりとなすにあり。而して、ダヴンポートの意味する Real Value は單に勞働の負擔にして交換經濟以前にも存したる概念なるが如し。されどスミスが果して Value in exchange と Real Value とをかゝる點まで嚴密に區別したるや否やは疑問なり。唯だスミスの學說の一解釋として之をこゝに紹介せり。[12]

斯くの如くスミスの所說に就きては其解釋を異にせるもの多きも、私見を以てすれば價値の起源は其財の生産に費されたる勞働の分量にして、價値の標準は其財によりて支配し得る勞働の分量なりと解し、兩者の勞働の分量は相等しとなすは、スミス價値學說の眞意ならんか。

（註一）Ricardo's Works, p. 9.
（註二）Ricardo: op. cit. p. 11.
（註三）Smith: op cit. vol. i. p. 35.
（註四）Smith: op. cit. vol. i. p. 49.
（註五）Ricardo: op. cit. pp. 12-13.
（註六）Malthus: Principles of Political Economy. 2nd Ed. 1836. pp. 84-85.
（註七）Malthus: op. cit. footnote on p. 83.

（註八）マルサス對リカルドの論爭の大要は扇田博士著『改定經濟學研究』（坤卷）第六篇（マルサス及リカルド研究）『二、價値の原因と尺度とに關するマルサスとリカルドとの論爭』を參照

（註九）マカロックは勞働を廣義に解して、人間の勞力、動物の勞力、自然界並に、機械の力にも之を適用せり。詳しくは、Wealth of Nations. McCulloch edition, Note and Dissertation. note I p. 435. を參照すべし。而して、價値を決定すべき勞働の內容に就きては同上四百四十三頁を見られ度し。

（註十）Wealth of Nations. McCulloch edition p. 439.

（註十一）McCulloch edition. p. 441.

（註十二）Davenport. Value and Distribution pp. 11-14

（十六）

扨て價値の起源は生產に費されたる勞働の分量なるが、其費用としての勞働も亦種々の意義に解することを得べし。余はダヴンポートと共に勞働費用の觀念を四つに分たんと欲す。

一、勞働購買費用 Labor-purchase cost. 二、勞働時間費用 Labor-time cost. 三、勞働費用 Labor-pain cost. 四、勞働價値費用 Labor-value cost. 是なり。

勞働購買費用の觀念は初期經濟學者の勞働價値說の根底をなすものにして、斯の聖書に言へる「汝の額に汗して汝の麪麭を得よ」との敎訓に其源を發せるものにして、ヒュームが「此世のすべてのものは勞働によりて購はれたるものなり」と言ひ、スミスが又之に傚ひて、「勞働はすべてのものに對して支拂はれたる第一の價格即ち最初の代金なり」と言へるが如き思想之なり。勞働時間費用の觀念は價値の基本的秤量並に異れる價値物件の比較方法研究せられ、如何なる方法によりて勞働が費用として採用せられたるかを研究するとき生ずる觀念として時間又は日數によりて秤量するは最も便利なるが故なり。されど單純素朴なる時間の觀念を以て價値を秤量せんとするは無謀なり。時間費用の觀念は單に時間其ものに重きを置くものにあらずして、財の生產に要したる手數と苦痛とを意味するなり。故に費用の觀念の漸く進むに至るときは苦痛費用は少くとも個人的秤量に於ては時間費用の其根底たるなり。之れ即ち勞働苦痛費用の觀念なりとす。次に論ずべきは勞働價値費用なり。勞働が或程度の苦痛を伴ふが故に其苦痛は勞働の存在にとりて必要的條件なりと考へらるゝに至るは論理の必然的經路なり。他人の勞働を支配せんとするとき人は常に其購買力を犧牲とするが如く、自己の勞働を使用するに當りても勞働に隨伴する苦痛なる費用に依りて彼自身の勞働を使用すと考へ得るなり。故に其費用に基きて生產物の價値に關係なく勞働に或る價値を附與するは當然なり。而して、この勞働の價値は生產物に轉嫁し生產物の費用として、其內に合體し生產物の價値は其生產行程中に消費せられたる勞働價値なりとなすにあり。(1)

價値決定の原因としての勞働の意義に對してスミスが其價値論中に與へし解釋は多種多樣なるが如くなるも、結局ダヴンポートの擧げたる以上四種に之を要約することを得べし。スミスは國富論の卷頭に一國民の年々の勞働はすべての人生の必需品並に其他の日用品を供給する淵源なることを指摘し、更に第一卷第五章に於て「勞働はすべてのものに對して支拂はれたる第一の價格即ち最初の代金なり」と論ぜるは正に勞働購買費用の觀念を採れるものなり。而して勞働購買費用說を社會的に見るときは、生產に費されたる勞働全體を以て全生產物を購入せるものとなすなり。即ち一社會の全生產物と全勞働とは共に一單位として取扱はるゝものにして斯くの如くするときは、其生產物の各部分間の

交換比率を求むるを得ざるの不便あるを免かれず。さればスミスは斯かる集合的費用と社會的所得との觀念より離れ來りて競爭的費用と交換價値との觀念に入り來れるなり。

スミスは、原始時代にありては、物の價値を決定する唯一の標準は之に投ぜられたる勞働の分量にして例へば狩獵民族の間にありて海狸を殺すに要する勞働の分量が鹿を殺すに要する勞働の二倍なりとせば、一匹の海狸は二匹の鹿と交換せらるべしと言へり。[3] これ明かに勞働時間費用說なるもスミスはかゝる說を固持せざりき。而して「物の眞實の價格即ち其物を獲得せんと欲する人に對して眞に費用となるものは其獲得に要する手數と煩勞となり」[3] と言へるは正に勞働苦痛費用說なり。スミスは此の場合勞働の同一性を認め生產者は常に物を生產せんとせば彼の安樂、自由並に幸福の一部分を犧牲に供せざる可からず。而して「勞働の同一量はすべての時と所とに於て勞働者に取りては相等しき價値を有する」[4] ものなるが故に財の生產に對しては常に勞働の價値を費さゞるべからず。之れ彼の勞働價値費用說にして、スミスの費用としての勞働の觀念は、此の最後の意味のものなるべし。若し果して然りとせば、是れ或は彼の勞働尊重の思想と當時に於ける啓蒙哲學の人格尊重論との影響に依れるものならん。而して、勞働の內容は Labor-command の場合に於ては、將來財となるべき勞働にして、Labor-cost の場合に於ては手數、煩勞、苦痛又は主觀的犧牲、不效用なり。スミスの意味する所は後者にして、主觀的なる犧牲、不效用等が客觀的秤量を許されたるは、前に言へるが如く、勞働の同一性を認めたるが故なり。[5] この點迄はリカルドはスミスと同說なるも彼は其 Principles of Political Economy の第一章價値論を終へて第二章地代論に入るや、

"The exchangeable value of all commodities, whether they be manufactured, or the produce of the mines, or the produce of land, is always regulated, not by less quantity of labour that will suffice for their production under circumstances highly favourable, and exclusively enjoyed by those who have peculiar facilities; by those who continue to produce them under the most unfavourable circumstances; meaning by the most unfavourable circumstances the most unfavourable under which the quantity of produce required renders it necessary to carry on the production."[6]

と言ひて、第一章の所論に著しき制限を加へたる點は、リカルドがスミスと其說を異にする所なり。而して、余はこの點に於て、リカルドの學說がスミスの夫れよりも一歩を進めたるものなりと信ずるなり。

（註一）Davenport:—op. cit. pp. 1-4.
（註二）Smith:—op. cit. vol. i. p. 49
（註三）Smith:—op. cit. vol. i. p. 32.
（註四）Smith:—op. cit. vol. i. p. 35
（註五）Whitaker:—op. cit. p. 33
（註六）Ricardo:—op. cit. pp. 37-38.

（完結）

財政經濟評論

浪速次郎

勞働代表者問題

本年十月に米國首府に於て開催せらるゝ國際勞働會議には我國よりも代表者四名を參列せしめなければならぬが、其の中政府の代表者二名